

2018年度（第8回）日独タンデム合宿報告

2018年9月3日（月）から9月8日（土）まで、草津セミナーハウス（関東甲信越地区国立大学共同利用施設）で第8回日独タンデム合宿を行った。これは、日本語研修旅行で来日したドイツ・エアランゲン大学の日本学専攻学生と、本学でドイツ語を学ぶ学生が、互いに言葉と文化を学び教え合う合宿である。今回は東京外国語大学の学生が19名、エアランゲン大学の学生が19名、教員が3名（東京外大2名、エアランゲン大学1名）参加した。（日程の詳細については別紙参照。）

合宿の柱となる「タンデム」は日独1対1で行う。まず、インタビュー形式でパートナーから特定のテーマについて情報・意見を聞きだしてメモをし、そのメモを元に、日本側はドイツ語で、ドイツ側は日本語で作文をする。書き終わったら、パートナーと作文を交換して互いの作文を添削し、最後にお互いの作文についてパートナーと一緒に検討しながら仕上げ、音読の練習もするというもので、ワンセットが約3時間。これを4回行った。今回のテーマは、あらかじめ設定した「日独の食文化」、「ジェンダー」、「学生生活」と各ペアで事前に相談して決める「自由テーマ」の4つだった。加えて5回目のタンデム練習として、各自が書いた作文4点から1点を選び、パートナーと協力しながら推敲して仕上げ、練習をした上で、グループ全体の前で発表した。



草津へのバス移動時やセミナーハウスでの食事時には日本側とドイツ側の学生が混ざるように座らせ、自然な状況で会話練習ができる環境を整えるよう配慮した。現地ではタンデム練習の他にも、日独混成グループで草津町の温泉文化についてのリサーチとそのプレゼンテーション、また、日独二言語での寸劇の創作・練習・上演なども行い、総合的な言語運用の練習の場を提供した。また希望者は国立療養所栗生楽泉園に隣接する重監房資料館を見学し、ハンセン病と人権問題について考える機会を得た。

本学の学生たちは同世代のドイツ人学生と6日間共同生活を行い、タンデムやグループ活動を通じて、教室で学んだドイツ語を実地で使い、同世代の若者との交流を深めることができただけでなく、ドイツ人学生の日本語学習を支援し、日本についての問いかけに答えることよって、日本語と日本文化について改めて考えることができた。

(文責 成田節)



集合写真